東海大学紀要産業工学部5（2012年）33頁～40頁
Bull. School of Industrial Engineering Tokai Univ., 5(2012), pp.33-40

ギリシア・ローマ劇場の舞台背後に配置される建物について

渡邊道治*

On the Architecture at the Backside of Stage Building in Greek and Roman Theaters

by
Michiharu WATANABE

(Received: September 30, 2012, Accepted: February 20, 2013)

Abstract

In this paper, through analyzing the plan, positions and functions of the architecture located at the backside of stage building in Greek and Roman theaters (ca, 140 examples), the following results are gained. At the backside of it in more than half examples there is so-called open space, especially the closed open space by porticos and walls. Furthermore, quadriporticus are used in the two-third examples of the closed open space. It is highly probable that the closed open space would be constructed at the backside of stage building at least between the end of second century B.C. and the beginning of first century B.C. in the Central Italy. In the first half of first century B.C, it is certain that the quadriporticus post scaeneam was began around Rome, and until the Augustan period it was established as a building type and diffused in the Ancient Mediterranean World. And so, we know that the description of Vitruvius on the porticus at the backside of the theater is based on general manner at the age. In the Imperial age the open space at the backside of stage building did not usually functioned as sanctuary, agora and forum expect some examples in Asia Minor, whereas until the Hellenistic period the theaters were sometimes faced to sanctuaries and agoras. The backside of stage building faced directly on the street is constantly constructed through the Hellenistic and Roman period.

Key Words : Roman Theater, Greek Theater, porticus post scaenam, stage building

[1]研究の目的・方法・資料について

劇場建築はギリシア・ローマ都市においてきわめて重要な公共建築のひとつであり、都市生活者にとって生活の一部として組み込まれた物であった。そのことは劇場が多くの都市で建築遺構として確認されていること、大きな都市においては複数の劇場が備えられていたこと、あるいは当時の文献資料においても演劇に関する資料が多いことからも容易に推測がつく。現存する遺構の状況から見ると、劇場は単なる個別の独立した建築から次第に都市を構成するひとつの重要な要素としての建築へと変貌を遂げて行ったと推測される。すなわち、劇場は単なる観劇のための施設としての役割、都市の中で果たす役割、そして都市の景観を作るという役割を持つようになったと考えられる。

そこで本稿の目的は、劇場が都市の中で果たす役割や都市の景観を作る役割を知るための第一段階として、劇場の舞台背後における建築物の有無、その平面形態、用途について明らかにすることである。

本論では、まずローマ時代の建築家ウィトルウィウスの記述について本稿に関連する部分に関して考察し、次の記述について本稿に関連する部分に関して考察し、次に舞台背後に整然とした平面をなす閉じたオープンスペースを持つ場合、平面が定まらない緩やかに閉じたオープンスペースを持つ場合(図 1)、そして舞台の裏側が直接街路に面する場合に分けて述べることとする。

上記の目的のために分析対象とした劇場は、ギリシア時代、ヘレニズム時代、ローマ時代に古代地中海世界に建設された劇場で舞台の裏側の状況が遺構としてある程度判明している 140 例である。遺構として、あるいは文献上で確認できる劇場は 900 例ほど確認でき、舞台部分の建築およびその背面が平面の上からある程度判明する事例は 395 例見られるものの、その中で舞台の背面側の建物や街路の有無、その建物の平面が判別できるのは上記の事例数になる。このように分析対象がかなり絞り込まれた事例数に限定されるのは、劇場が建築として比較的規模の大きなものであること、劇場本体の外側までを含むような広い範囲での発掘調査はあまり行われなていないこと、舞台背後には周柱廊などのより規模の大きな建物が建つ場合がしばしば予想されることなどの理由から、劇場舞台の背後の状況が比較的良く判明する事例がきわめて限られてくるためである。

* 産業工学部建築学教授

本稿で分析対象とした140例の場合を概観すると、劇場の舞台背後に壁や列柱廊で閉じたオープンスペースを持つ場合が69例、何らかのオープンスペースを備えているがそこが閉じた空間となっているとは言い難い場合が11例、フォルムやアゴラが存在していたことは分かるがそれがどのように囲まれていたか不明な場合が（おそらく列柱廊等で囲まれていた可能性はきわめて高いと推定される）8例、街路に面している場合が29例、市壁が隣接している場合が7例、舞台背後が崖地となっている場合が4例、その他の場合が11例であった。

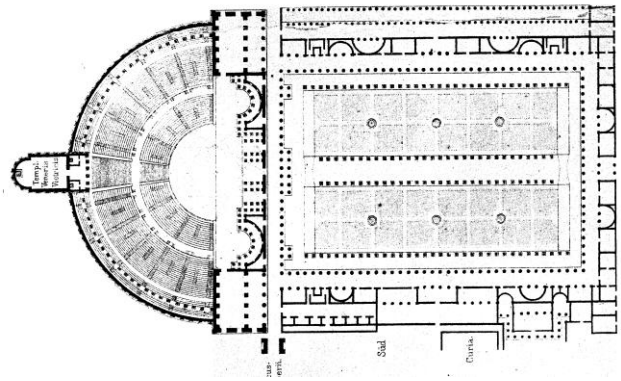

図1　ローマのポンペイウス劇場平面図

[2]ウィトルウィウスの記述

アウグストゥス時代のローマの建築家ウィトルウィウスは彼の建築十書の中の第5書、第9章、第1、5、8、9節の中で劇場の舞台裏側の建物について言及している(1)。その中で指摘されている事は、スカエナ（すなわち舞台）の背後には「柱廊」が建てられるべきである、としている。次に、その「柱廊」には複数の役割があることを指摘している。その役割とは、にわか雨の際に人々が避難する場所であり、歌舞隊の準備のための場所であり、さらに都市の非常時に薪や穀物を貯蔵し、住民にそれらを配布するための場所であることをあげている。また、「柱廊」で挟まれた場所の扱いについて触れ、そこは露天となって緑で装うべき、と述べている。

これらの記述から劇場の舞台背後の建物について以下の3点が読み取れる。第1に劇場の舞台背後には「柱廊」が建てられるべきであると明確に述べていることである。ただし、この「柱廊」が単なる列柱廊なのか、周柱廊をなすのか、あるいは列柱廊を含む何らかの形のなすものを示すのか明瞭ではない。なぜならウィトルウィウスはラテン語のporticusという単語を使用しており、これは列柱をなすものの全般を意味し、周柱廊であるのかなど特定の平面を限定しているわけではない。それを例証するように、同書同章の第1節でウィトルウィウスがporticusの具体例として取り上げているのはローマのポンペイウス劇場に付随する周柱廊やアテネのディオニソス劇場にある単純な列柱からなるエウメネス柱廊を取り上げている。さらに、同書同章の第5節では「柱廊に挟まれた中央のスペース・・・」という記述が見られ、舞台背後の柱廊はスペースを挟む、あるいは囲むものであるという認識を示している。

第2に、この「柱廊」を舞台背後に建てるべきであるという考えはウィトルウィウスが建築書を記述したとされるアウグストゥス時代にすでに存在していたことである。さらに、そこでポンペイウス劇場のような具体例があげられていることから、少なくともアウグストゥス時代の少し前の時代から劇場の舞台背後にウィトルウィウスが述べる「柱廊」が建設されていたことが文献の上から確認できる。第3に、舞台背後に置かれる「柱廊」は確かに複数の役割を担っていたとみられるが、劇場に来た人々の緊急避難や出演者の利用など基本的には劇場に関連する機能を満たすことが重要な役割であったこと、そしてそのために劇場とは密接に関係していたことが文献の上から確認できる。

[3]舞台背後に囲まれたオープンスペースが配置される場合

劇場の舞台背後に列柱廊や壁で矩形などの整形の平面をなす囲まれたオープンスペースを備えた建物が作られているものが、今回の分析では69例確認できた。その閉じられ方を分類すると四周を列柱廊で囲んだ周柱廊の場合（45例）、3方を列柱廊でコの字形に囲み、残りの1辺側が壁のみの場合（7例）、2方向に列柱廊を配し、残りの2辺は壁で閉じた場合（2例）、1辺のみを列柱廊とし、残り3辺は壁で閉じる場合（8例）、最後に四周すべてを壁で閉じる場合（7例）の5通りである。

この結果からまず明らかとなることは分析対象140例の約半数において、劇場の舞台の背後には何らかの建築物によって明確に囲まれたオープンスペースが存在していたことである。さらに、そのオープンスペースがどのように囲まれていたか不明であるものの、アゴラやフォルムが存在していたことが判明する8例を加えると、これらは何らかの囲まれた空間を作り出していたはずであるから、今回の分析対象140例中の77例（=69+8）とその半分以上が該当することが明らかとなった。

(3-1)周柱廊の場合

劇場の舞台背後に閉じたオープンスペースを作る場合、その多くは四周に列柱廊を巡らした周柱廊をなす場合が一般的であることが遺構の上から確認できた。すなわち、

69 例中の約 2/3 に相当する 45 例では、舞台背後に周柱廊による閉じたオープンスペースが作られていた。周柱廊が作られた地域（現在の国名で）と年代をまとめたのが表 1 である。本稿では、表作成の段階の建設年代の区分で、ウィトルウィウスが建築書を記述されたとされるアウグストゥス時代を、特に区分して集計することとした。この表から読み取れるように、舞台背後に周柱廊を備えることはヨーロッパ、北アフリカ、中近東に存在していることから地中海世界全域に分布していたことが確認できた。イタリアに 13 例、トルコに 10 例と特に 2 つの国に多く確認されているものの、これはもともとの現存遺構数がこれら 2 つの国にきわめて多くの確認されていることを反映したものであると解釈できる。

表 1

建設年代 / 国名	前1世紀	アウグストゥス時代	1世紀	2世紀	3世紀	4世紀	帝政	建設年代不明	合計
合計	3	10	7	13	5		2	5	45
イタリア	2	4	3	2	1		1		13
スペイン		2	2						4
フランス		2							2
アルジェリア		1							1
チュニジア				1	1				2
リビア		1			1				2
ギリシア				2	1			1	4
トルコ			1	6			1	2	10
イスラエル			1		1			1	3
ヨルダン			1	1					2
イラク				1				1	2

一方、この表から劇場の舞台背後に周柱廊が作られた年代を見ると、紀元前 1 世紀にイタリアで確認でき、アウグストゥス時代になると 10 例と急激に増え、しかもフランスやスペインなどの西側ヨーロッパ、アルジェリアやリビアなど北アフリカなど広い範囲に見いだせる。その後、1 世紀に 7 例、2 世紀に 13 例、3 世紀に 5 例と途切れることなく見いだすことができる。すなわち、周柱廊を劇場の舞台の背後に建設することは紀元前 1 世紀から帝政ローマ時代を通じて常に一般的に行われていたことが遺構の上から実証された。特にアウグストゥス時代に多くの劇場の舞台背後に周柱廊が作られていたことが確認できたことは、ウィトルウィウスの記述した時期とも一致し、改めて彼の記述が遺構の上からも実証されたことを意味する。

今回取り上げた現存遺構の中で劇場の舞台背後に周柱廊を配置した最古の事例は紀元前 1 世紀前半に建設されたイタリアのトゥスクルム Tusculum(図 2)と紀元前 55 年に献堂されたローマのポンペイウス劇場(図 1)である。トゥスクルム場合では劇場の建物が独立して建ち、その舞台背後に作られた小部屋を通して周柱廊を巡らしたフォルムに繋がっている。したがって、後の劇場建築に見られるように舞台背後に一体化した建築として周柱廊が建設されていたわけではない。これに対してポンペイウス劇場の場合、舞台背後に建築的に一体化した周柱廊が建設されていた。ただし、その現存遺構は考古学的調査によって確認されているわけではない。しかしながら、セプティミウス・セウェルス時代に作られた通称マーブル・プランにもこの劇場の舞台背後にあった周柱廊の平面の一部が見え、プリウニウス[(2)]がここに様々な芸術品が置かれていた（展示されていた）ことを記述しているのをはじめ、キケロ等[(3)]の他の多くの文献資料からもその存在を確認できる。アウグストゥス時代の事例を見ると、ローマに紀元前 13 年に建設されたバルブス劇場、スペインのカルタゴ・ノーヴァ Cartago Nova（現在のカルタヘナ)、フランスのフォルム・イウリイ Forum Iulii (現在のフレジュス)、リビアのレプティス・マグナ Leptis Magna といったイタリアよりも西側の地中海都市を中心に広く見いだすことができる。つまり、現存遺構を概観して得られた顕著な結果は、劇場の舞台背後に作られる周柱廊が少なくとも紀元前 1 世紀に中部イタリアにその類似例を見いだせ、同世紀の中頃にポンペイウス劇場という形でローマに突如として巨大な規模で出現し、その後わずか半世紀ほどの間に地中海世界に一気に広がったことである。

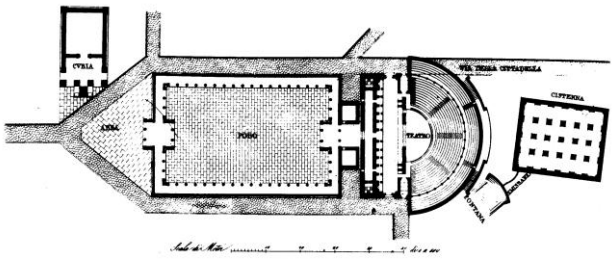

図 2　トゥスクルムの劇場平面図

(3-2) 周柱廊以外の場合

劇場の舞台背後に閉じたオープンスペースが配置され

る場合に、3 方を列柱廊で、残りを壁で囲む事例は今回の分析では6例確認できた。イタリアに2例、クロアチア、ギリシア、トルコ、スペインにそれぞれ1例ずつであった。建設年代から見る紀元前59年から紀元前44年の間に1例、アウグストゥス時代に2例、1世紀中頃過ぎに1例、ローマ帝政期に1例、年代不明が1例であった。最も古い例はイタリアのミントゥルナエ Minturnae の場合（紀元前59年から紀元前44年）（図3）で、3方を列柱廊で囲まれ、残りの1方は街路に面するが、そこには神殿が聳え建つように配置されており、劇場は列柱廊の背後に建設されたものである。より計画的で整然とした矩形平面をなして同様の囲み方をしている例として、アウグストゥス時代に建設されたアオスタの劇場とそれに隣接する広場があげられる。今回の分析で確認されたものは6例にすぎないが、3方を列柱廊で、残り1方を壁で閉じられたオープンスペースが少なくとも紀元前1世紀中頃には劇場の舞台背後にイタリアで作られていたことが確かめられた。また、この囲み方は古代地中海世界の北アフリカを除く各地で建設されていたことも明らかとなった。

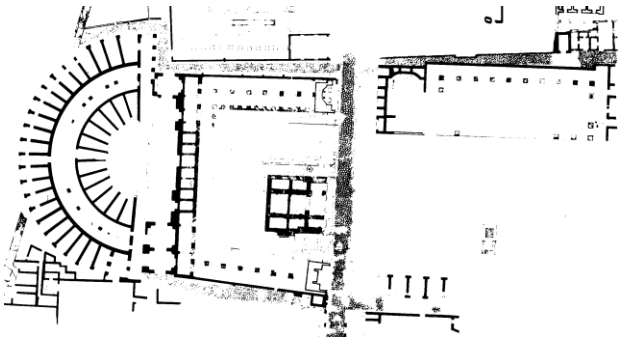

図3　ミントゥルのナエ劇場平面図

舞台背後に配置された閉じたオープンスペースの2方向に列柱廊を配置する場合はわずか1例で、ギリシアのカソッペ Cassope のアゴラに面する劇場の場合のみである(図 4)。ここではアゴラのオープンスペースの隣り合う2辺側にそれぞれストアが別棟で作られ、残りの1辺側に劇場が舞台側をアゴラに面して紀元前3世紀に建設され、残りの1辺側は外側に向かって開いている。この事例はきわめて特殊で、アゴラが傾斜地に置かれることで外側に開いた辺側では遠くの眺望が得られるようになっている。

舞台背後に配置された閉じたオープンスペースの1辺のみに列柱廊を建てる事例を見ると7例確認できた。この場合では、一般的に、舞台の裏側に背中合わせに列柱廊が直線状に作られ、残りの3辺側が壁で囲まれている。これに該当するのはイタリアに3例、アルジェリアとチュニジアに2例ずつ、オーストリアに1例であった。最も古い例は紀元前13年から紀元前11年に作られたローマのマルケッルス劇場(図5)で、舞台背後に列柱廊、残り3辺側は壁で囲まれ、さらに舞台と反対側の壁の中央部は円弧状に膨らんでいる。その後、1世紀には1例、2世紀に2例、3世紀に3例が作られている。つまり、列柱廊を一辺に置き、残り3辺を壁で囲む平面形式の場合、少なくとも紀元前1世紀末頃にはイタリアで作られており、その後ヨーロッパや北アフリカで確認できることが明らかとなった。

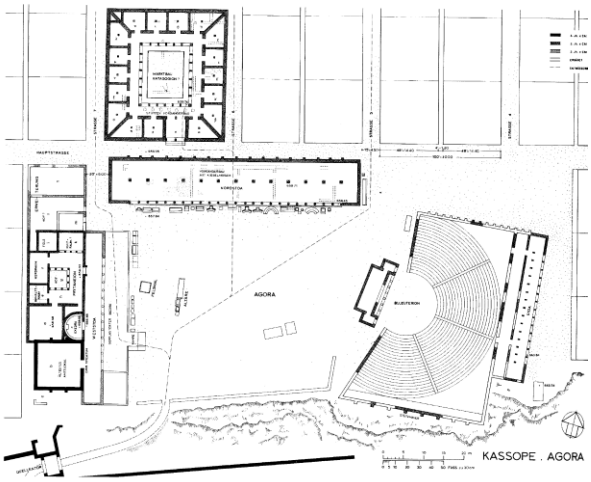

図4　カソッペの劇場平面図

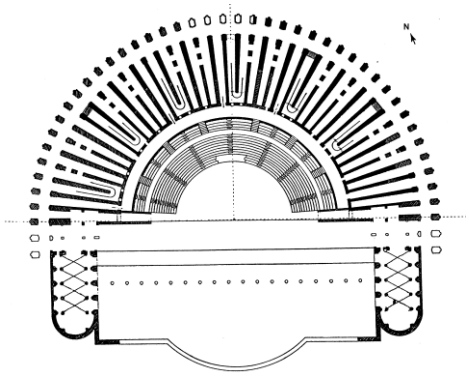

図5　ローマのマルケッルス劇場平面図

最後に、劇場の舞台背後に列柱廊ではなく、壁のみで囲んで閉じたオープンスペースを作り出す場合を検討して見る。今回の分析では6例がこれに該当した。それらを地域別に見ると、フランスに2例、イタリア、チュニジア、リビア、シリアにそれぞれ1例ずつであった。つまり、遺構数がきわめて限定されているにもかかわらず、古代地中海世界全域で見いだすことができた。その中で

最も古い事例はイタリアのサルノに紀元前100年頃に建設されている。そこでは舞台背後に矩形平面の閉じられたオープンスペースが作られたいたことははっきりしている。ただし、アウグストゥス時代に舞台部分が再建されており、背後の壁のみで閉じたオープンスペースが再建時に新たに作られたのか、もともと当初から存在していたのかははっきりしていない。したがって、当初から作られていたとするならば紀元前100年頃から、もし舞台再建時につくられていたとしてもアウグストゥス時代には壁のみで囲まれたオープンスペースが舞台背後に建設されていたことが明らかとなった。

以上の分析より、劇場の舞台背後に列柱廊や壁によって囲まれたオープンスペースを配置するという手法に関して、現存遺構から見て以下のような結果が導かれる。すなわち、そうした手法は、その囲み方の違いはさておき、少なくともイタリアにおいて、より限定するならばイタリア中部で、紀元前2世紀末から紀元前1世紀初め頃にはすでに行われていた可能性がきわめて高い。さらにアウグストゥス時代にはウィトルウィウスが記述するようにすでに普遍的な手法としてローマ帝国内全域に知れ渡っていた。その上、ローマのポンペイウス劇場やアウグストゥス時代の現存遺構から明らかなように、ほんの数十年の間にきわめて規模が大きく壮麗な建築として作られるようになっていたと見なせる。

(3-3) 囲まれたオープンスペースの用途

劇場の舞台背後に周柱廊であれ、あるいは壁のみであれ舞台の背後に整形の平面をなした囲まれたオープンスペース 69 例について、その用途を区分したものが表 2 である。この表より、その用途が特定しがたいものが44例あって、全体の約2/3を占め、圧倒的に多いことが一目瞭然となった。つまり、劇場の舞台背後に置かれる閉じたオープンスペースは、神域あるいはアゴラやフォルムといった劇場に関係しない機能を持つ場合はそれほど多くない。むしろその機能に応じた名称がつけがたいもの、換言すれば劇場の役割の一部を担うものとして使うことを目的としていたと推定される場合が多数であったことが遺構の上から明らかになった。

今回の分析で、舞台背後の囲まれた整形平面をなすオープンスペースが神域となる場合は比較的少なく、6 例のみであった。その内訳は、イタリアに4例、北アフリカに 2 例であった。イタリアの初期の例は、紀元前 59 年から紀元前 44 年に作られたミントゥルヌム(図 3)と、紀元前1世紀末から1世紀前半に建設のグルメントゥム Grumentum である。北アフリカの初期の例は、建設されたリビアのレプティス・マグナの劇場の舞台背後に、1-2年頃に周柱廊で囲まれた神域である。後述することになるが、劇場の舞台背後に神域が存在する例は、アテネのディオニソス劇場とその背後の神域に代表されるように(図6)、紀元前4世紀からいくつかの事例をギリシアで確認できる。それらの神域は建築的に整然とした平面形で閉じたオープンスペースをなしていなかった。このように今回確認された事例はすべて紀元前1世紀以降建設され、イタリアや北アフリカのみであることから、事例数は少ないものの、劇場の舞台背後に整然とした平面形をなす神域が、ギリシアや小アジアなどの東地中海世界ではほとんど作られていなかったことが明らかとなった。

表 2

用途 / 囲み方	神域	アゴラ、フォルム	広場	合計
周柱廊	4	6	27	37
3方に列柱廊+1方に壁	1	2	3	6
2方に列柱廊+2方に壁		1	1	2
1方に列柱廊+3方に壁	1		6	7
すべて壁			7	7
合計	6	9	44	69
平面形不明で囲まれたオープンスペース		8		

一方、舞台背後にフォルムやアゴラが立地する場合をみると、その平面形と囲み方が判明するのは表2に見られるように9例であった。しかしながら、発掘調査が十分に行われていない状況を考慮して、その平面形が定めることはできないが、舞台背後にアゴラもしくはフォルムが造られていたと確定できるものが上記の9例以外にさらに8例を見いだした。したがって、今回の分析では舞台背後にアゴラもしくはフォルムを持つ場合として17 例を確認したことになる。これら 17 例の中で、イタリアのメタポントゥムに紀元前4世紀末から紀元前3世紀初めに、ギリシアのカソッペに紀元前3世紀に建設された劇場の場合は、アゴラのオープンスペースの1辺側を閉じるような位置に劇場の舞台側を配置している。つまり、劇場はアゴラを構成する建築群のひとつの要素をなしていた。

それに対し紀元前1世紀前半建設のイタリアのトゥスクルムの場合には、明らかに劇場とフォルムという2つの建築物を隣接させて配置している。このように劇場の舞台背後にアゴラやフォルムを並べて紀元後に建設した例は14例確認できたが、その中の8例はトルコに集中し、その他の事例はイタリア、スペイン、アルジェリアに分

散して見いだせた。このことから、紀元前2世紀末頃までは、劇場はアゴラやフォルムの一部をなすものとしてその一方側に舞台側を見せながら配置されていたが、紀元前1世紀になると舞台背後に列柱廊や壁で囲まれたオープンスペースからなる別個の建築物として劇場に隣接して建てられるようになったことが新たに判明した。また、全体の事例数は少ないものの、ローマ帝政期の小アジアの都市では、シデなどに見られるように、フォルムもしくはアゴラと劇場を組み合わせた配置が他の地域に比べ比較的多いことが明らかとなった。

[4]舞台背後に緩やかに囲まれたオープンスペースが配置される場合

ここで述べるのは、劇場の舞台の背後に意図的にオープンスペースが確保されているものの、その周囲に建つ列柱廊やその他の建物が整然とした矩形平面のように明確に囲んだスペースを作り出していない場合を指す。これに該当する事例が今回の分析では11例確認できた。地域的にはイタリア、ギリシア、フランス、スイスで見いだせ、ヨーロッパ以外では確認できなかった。次に建設時代で見ると、紀元前4世紀に2例、紀元前2世紀に1例、アウグストゥス時代に2例、2世紀に5例、建設年代不明が1例であった。つまり、劇場が仮設ではなく恒久的な建築物として作られるようになった初期の頃より、舞台背後にオープンスペースが確保されることが行われていたことが確かめられた。

この事例に該当する最古のものは紀元前325年頃石造の劇場となったアテネのディオニソス劇場の場合である(図 6)。ただし、この場合は劇場の舞台背後にオープスペースを配置したというよりも、もともとディオニソス神のための神域が不整形の形で整備され、そこに劇場が作られたと解釈すべきである。なぜなら、ここでは紀元前6世紀前半には最初のディオニソス神殿が建設され、同世紀の後半には神域の壁が作られ、同世紀頃からディオニソス信仰に関連して祭事や演劇が行われていた。さらに紀元前4世紀後期、すなわちディオニソス劇場が石造化されるまでにはこの神域の北側であり、劇場舞台が恒久的建築として作られる場所との境界に長さ62mほどの長方形平面の列柱廊が建設された。同時期までに新しい神殿や祭壇、そして神域を取り囲む壁が整備されたのである。同様に神域に舞台背後が接するように作られた事例として同時期のギリシアのオロプス Oropus があげられ、アンフィアラオス Amphiaraos の神殿を祭った神域を縁取る列柱廊の背後に劇場の舞台が作られている。ただし、ここでは神域の囲まれ方やその平面は明瞭ではない。このように紀元前4世紀の該当する事例はギリシアで見いだせ、それらは神域をなしている。

それに対し紀元前2世紀以降に建設された事例はイタリア、フランスなどにあり、いずれもその背後のオープンスペースは神域ではない。たとえばポンペイの劇場の舞台背後には当初、曖昧に空けられたオープンスペースが確保されていたが、その後紀元前1世紀初期にそのスペースを残しながら少し離れた位置に剣闘士のための周柱廊が建設されている。この周柱廊をローマのポンペイウス劇場に見える周柱廊の始まりのように解釈されることがあったが、むしろ近年では剣闘士用の周柱廊とみなされている[(4)]。またフランスのヴィエンナやスイスのアウグスタ・ラウリカ Augusta Raurica などでは整然とした矩形の、あるいは明確な意図をもって明瞭に囲んだわけではなく、曖昧な形でオープンスペースが舞台背後に残されている。

以上の点から見て、現存遺構から見る限り、劇場建築が本格的に石造化して恒久的な建築へとなって行く当初の段階において、ギリシアでは舞台背後に神域がなすオープンスペースが広がっていることが確かめられた。しかしヘレニズム時代も紀元前2世紀以降になると、劇場の舞台背後に明確に限定された平面形を持たず、機能的にも神域ではないオープンスペースが確保されていることがヨーロッパの都市で見られるようになったことが明らかとなった。

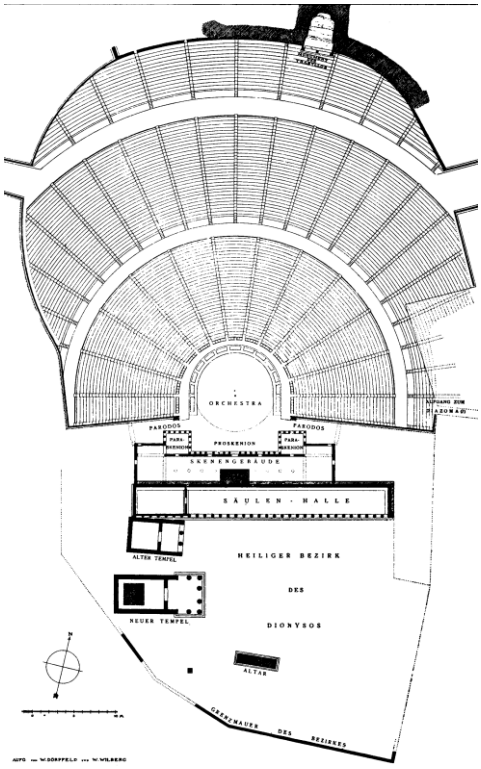

図6　アテネのディオニソス劇場平面図

[5]舞台背後が街路の面する場合

劇場の舞台背後に周柱廊や壁によって囲まれたオープンスペース、あるいは特定の建築物は無いものの意図的に空けられたオープンスペースが無く、舞台の背面が直接街路に面する場合がある。舞台の背後に街路が通っているということは他の場合のように周柱廊やオープンスペースが無いので、劇場は都市の中で他の建築物と複合化することなく独立して単独で建っていることを意味する。さらにウィトルウィウスの記述するような、観客が雨天の時に一時避難したり、出演者が上演の準備をしたりする場所を舞台背後に用意しないことを意味する。

これに該当する 29 例を地域と建設年代によってまとめたのが表 3 である。地域的にはヨーロッパ、北アフリカ、中東と古代地中海世界全域で見られることが遺構の上から確認できた。また、それぞれの地域に若干例ずつ見いだせることから、特定の地域に特別に偏って存在する傾向も見られなかった。古い例としてはシチリアのティンダリス(図 7)において紀元前 300 年頃に建設された劇場があげられ、それぞれの世紀に遺構が確認できた。2 世紀建設の事例が比較的多く見られるが、これはもともと遺構として確認できている劇場の建設年代がこの世紀の最も多いからであり、この 2 世紀に特別に独立し単独で建設される劇場が多かったわけではない。したがって、建設年代の上からの特段の偏りは見られない。

表 3

建設年代 / 国名	前4世紀	前3世紀	前2世紀	前1世紀	アウグストゥス時代	1世紀	2世紀	3世紀	4世紀	建設年代不明	合計
イギリス							1				1
ルクセンブルク							1				1
ギリシア		1	1							1	3
イタリア	1		2	1	1	1	2				8
スペイン						1					1
ブルガリア							1				1
マケドニア							1				1
エジプト									1		1
リビア							1	1			1
アルジェリア							1				1
トルコ			2			1	1			1	5
ヨルダン						1					1
シリア							2	1			3

舞台背後が街路に直接面するわけであるから、その舞台の背面がどのように街路と関係を持っているかを明らかにするために、舞台背面の処理の仕方について検討を加えてみた。その結果、舞台の背面が単なる壁面で仕上げられている場合が 20 例であり、残りの 9 例では列柱廊が作られ、その列柱廊を介して街路に面していた。たとえばギリシアのドドーナ Dodona（紀元前 297–紀元前 272 年）（図 8)やイタリアのノーラ Nora（2 世紀初め）では舞台の背面に街路に面して列柱廊が造られている。さらにイタリアのスエッサ Suessa の場合(アウグストゥス時代建設、1 世紀末から 2 世紀初期にスケーネを再建）には列柱廊とともにニュンファエウムやトイレなどが舞台背後に作り込まれて、それらが街路に面している。つまり紀元前 3 世紀頃より舞台背面が街路に直接面する場合に、そこに列柱廊を持つことがすでに行われていたし、場合によってはその他の施設が必要に応じて街路に面して備えられていたことが明らかとなった。

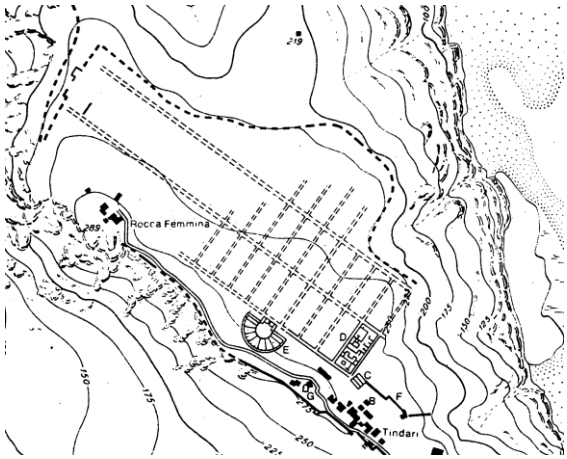

図 7　ティンダリスの街路と劇場の配置図

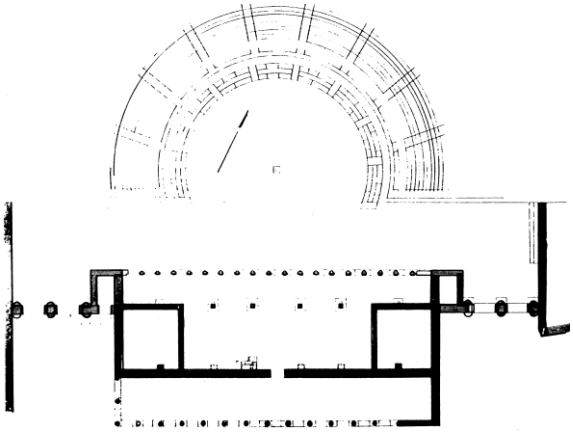

図 8　ドドーナの劇場平面図

[6]まとめ

ギリシア・ローマ時代の劇場の舞台背後の建物について、平面が判明する140例ほどの現存遺構にもとづき分析を行い以下のような結果を得た。

(1)劇場の約半数強はその背後に何らかのオープンスペース、とりわけ閉じたオープンスペースをもつ。さらに、閉じたオープンスペースの中でも、特に周柱廊を作ることが2/3以上を占める。

(2)舞台背後に閉じたオープンスペースを作ることは、イタリア中部で紀元前2世紀末から紀元前1世紀初めには行われていた可能
性がきわめて高い。

(3)舞台背後の周柱廊は紀元前 1 世紀前半にローマ近郊で作られ始めていたことは確実で、アウグストゥス時代にはすでに古代地中海世界でひとつの形式として使われており、ウィトルウィウスの記述は当時の一般的な手法を示したものと解釈できる。

(4)ヘレニズム時代までは舞台背後のオープンスペースが神域、アゴラ、フォルムの役割を果たす例が見られたが、帝政期にはそうした役割を果たす例は小アジアの若干例を除きほとんど見られなくなった。

(5)舞台背後が直接街路に面することはヘレニズム時代から常に行われ、時には列柱廊などが付加されていた。

注釈

(注1) 森田慶一訳注、ウィトルーウィウス建築書、東海大学出版会、1992年(第3刷), V, 9, 1,5,8-9

(注2) Plin. N.H., xxxv, 59, 114, 126, 132.

(注 3) Cic., Att., 4, 9, 1 , Prop., II, 32, 11-12 など。

(注 4)デ・ヴォスなどは周柱廊を劇場付属のものでウィトルウィウスの記述を裏付けるきわめて初期の好例と見なしている (A. and M., De Vos, Pompeii Ercolano e Stabia (Guide archeologiche Laterza), Roma - Bari, 1988, pp.67-68.)。しかし、近年ではリチャードソンなどのように周柱廊の建物は剣闘士専用の建物と見なしている(L. Richardson Jr,, Pompeii, Baltimore and London, 1989 (2nd ed.), pp.82-85)。

図版出典

図1:M.Bieber, The History of the Greek and Roman Architecture, Princeton, 1961, Fig.632.／図2: F. Coarelli, Dintorni di Roma (Guide archeologiche Laterza, Roma-Bari, 1981), p.123.／図3:F.Coarelli, Lazio (Guide archeologiche Laterza, Roma-Bari, 1993), p.370.／図4:W.Hoepfner, Geschichte des Wohnens, B.1, Stuttgart, 1999, p.372.／図5:F.Sear, Roman Theaters, Oxford University Press, 2006, pl.26.／図6:M.Bieber, op. cit., Fig.250.／図7:F.Coarelli e M.Torelli, Sicliia (Guide archeologiche Laterza, Roma-Bari, 1984), p.385. ／図8:S.I.Dakaris, Dodona, Archaeological Guide to Dodona, 1971, Ioannina, Fig.27より。

謝辞:本研究は平成24年度科研費基盤研究(C)、課題番号22560646により研究費助成を受けた成果の一部です。ここに記して深謝申し上げます。